



福井市自然史博物館

博物館だより

FUKUI CITY MUSEUM OF NATURAL HISTORY NEWSLETTER



写真／サツキマス（上）とアマゴ（下） 撮影：松田隆喜氏

福井の自然史情報

サツキマスとアマゴ

サケ科の魚類には、同じ種でも生活のしかたによって標準和名（日本で学術上用いられる名称）を2つ持つものがあります。例えば、サツキマスとアマゴは同じ種ですが、降海するものをサツキマス、降海せずに一生を河川で過ごすものをアマゴといいます。サクラマスとヤマメも同じ種の降海型と河川残留型です。

もともと日本海側に分布していなかったアマゴですが、1963年頃から九頭竜川など県内の一部河川で見られるようになり、その後、放流によって県内で分布域を拡大。これに伴い、もともと生息していたヤマメの分布域は縮小し、両種の交雑も起こっているようです。





淡水魚類学者 故加藤文男先生のご功績

福井市自然史博物館 館長 吉澤 康 暢

福井県内はもとより全国各地の河川や湖沼をフィールドに、長年淡水魚類の調査・研究を続けてこられた加藤文男先生（当館魚類専門の協力員）が2013年2月25日に79歳で生涯を閉じられました。謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈りいたします。

先生は、1933年（昭和8年）4月に越前市轟井町でお生まれになり、幼少の頃より川遊びが大好きで、淡水魚類には大変興味を持たれていたようです。また、お父様のアユ釣りにも幾度となく同行され、淡水魚類への興味は益々増していかれたようです。進路は金沢大学理学部生物学科に進学され、卒業後は教職の道に進まれ、最初は福井県立三国高等学校に勤務されました。その後、丸岡高等学校、丹生高等学校、武生高等学校、足羽高等学校、高志高等学校と転任され、定年後は仁愛女子短期大学教授を務められました。

武生高等学校在職中、淡水魚類学者の故五十嵐 清先生との運命的な出会いがありました。五十嵐先生は、当時陸封型イトヨの研究で学位を取得されていました。加藤先生は、五十嵐先生から研究者としての姿勢、研究内容などについて強い刺激を受けられたようです。この頃より、加藤先生は長良川水系、琵琶湖水系、九頭竜川水系に生息する「アマゴの形態的特性と生活史に関する研究」に取り組まれました。多忙な教職生活が続けながら、休日や夏休みを利用し長良川や琵琶湖をはじめ、九頭竜川上流の奥地にまで出かけるなど努力を続けてこられました。これらの研究成果を一大論文にまとめ上げた結果、1988年（昭和63年）に東京大学大学院農学系研究科より農学博士の学位を授与されました。

学位論文の研究内容は、日本特産のアマゴについて従来不明な点が多かったことから、近縁種とも比較しながら、形態、生活史、分布などについて研究し、アマゴの生物学的特性を明らかにしたものです。アマゴには降海型と河川残留型の二型があり、生態ならび

に形態学的観点から、アマゴは独立した種であるとししました。そして、サクラマス群にはアマゴ、ビワマス、サクラマスの3種がみられ、アマゴは西南日本の海域に適応して分化したサケ属魚類の一種であると結論づけました。

この他、先生が執筆された淡水魚類に関する研究論文や報告書は150編以上にもおよびます。また、福井県レッドデータブック（動物編）の陸水生物調査部会長として、淡水魚類の調査はもとより報告書の執筆などにも尽力されました。さらに、1980年福井陸水生物研究会（後にNPO法人）を設立され、その運営責任者として生態系の保全や自然環境保護に精力的に取り組まれました。

当館とは1982年（昭和57年）4月よりのご縁で、これまで当館の魚類専門の協力員として31年間の長きにわたり協力をいただきました。晩年、月に約一度のペースで鯖江より福武線に乗って、山高帽に背広姿で足羽山の博物館に通って来られました。淡水魚類の液浸標本の整理が主な目的で、その成果は当博物館の研究報告にサケ科魚類の目録としてまとめていただきました。また、これまでに先生が研究の成果として集められた淡水魚類の液浸標本は約1000点におよびますが、すべて当館に寄贈していただいています。さらに、ご自宅に保管されていた液浸標本約100点を奥様より寄贈していただきました。これらの標本は、県内外の淡水魚類相の移り変わりを知るためには欠かせない貴重なものばかりです。大切に保管し、活用させていただきます。

このように、先生が生涯をかけて続けてこられた淡水魚類の調査・研究の標本やデータは膨大であり、淡水魚類相の実態把握やその保全に尽くされたご功績はとて大きく、先生への尊敬の念と偉業を実感しています。

寄贈された魚類標本

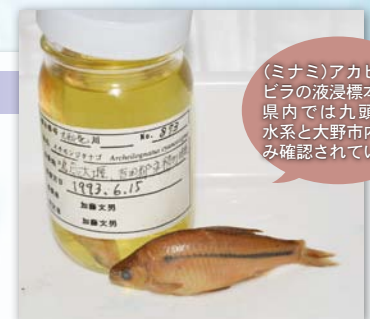
2013年2月25日に逝去された加藤文男先生の収集された魚類標本約100点が、同年10月5日に当館に寄贈されました。先生は、1960年代半ばより県内の淡水魚類相の調査をはじめられ、この成果として集められた標本の一部を生前より当館に寄贈して下さっていました。2008年には、これらの標本のうち、サケ科魚類についての目録を当館の研究報告に投稿していただきました。この報告文には、順次整理の済んだ標本について目録としてまとめていきたいという先生の思いが綴られています。その道半ばで先生がお亡くなりになったことが残念でなりません。

加藤先生は県内の淡水魚研究の第一人者であり、その調査の成果として集められた証拠標本は県内の淡水魚相の移り変わりを知る上で非常に貴重な資料といえます。例えば、先生

のコレクションの中には、絶滅危惧種であるタナゴ類（（ミナミ）アカヒレタビラ、ヤリタナゴ、アブラボテ）の標本も多く含まれています。寄贈

いただいた資料は整理を進め、一日も早く目録を公開することで、福井県の淡水魚相の研究資料として多くの方に利用していただければと思います。末筆になりましたが、このたび加藤先生の標本を当館に搬入する際にご協力いただきました松田隆喜・岡 友章・夢田照代の各氏に心より御礼申し上げますとともに、加藤先生のご冥福をお祈りいたします。

学芸員 梅村 信哉



加藤文男先生

福井県立福井農林高等学校 教諭 松田 隆喜



福井県の淡水魚研究に非常に大きな功績を残された加藤文男先生が、2013年2月25日に逝去されました。享年79歳でした。2012年に発行された「福井陸水生物会報」19号に1964年から2011年までに発表された先生の著作目録が掲載されています。研究論文や報告書は実に150編に及びます。先生の専門であるサケ科魚類だけでなく、それ以外の淡水魚類についても数多くの研究論文が掲載されており、淡水魚全般の生態や生息環境の解明に精力的に取り組んでいたことがうかがい知れます。また、自身の研究以外にも、「みどりのデータバンク」(福井県の淡水魚)、「福井県大百科事典」(淡水魚)、「福井県のすぐれた自然」(陸水生物)、「福井県レッドデータブック」(淡水魚)など、本県の淡水魚関係の著作物はそのほとんどが先生の手によるものです。

先生は研究執筆もさることながら、1980年、前田正紀氏、安達誘氏とともに福井陸水生物研究会を設立、その運営の責任者として活動してきました。2004年、福井陸水生物研究会はNPO法人となり、生態系の保全や自然環境保護にも取り組むようになっていきます。先生自身も晩年は、淡水魚研究だけでなく、自然再生といった環境教育にも力を入れ、さらに活動の場を広げていかれました。

私と先生との出会いは1988年、先生が「アマゴの形態的特性と生活史に関する研究」で東京大学大学院農学系研究科の博士号を取得された年です。その存在はあまりにも偉大なものでしたが、同じ生物教員ということで、話をさせてもらう機会がありました。その中で強烈に突き刺さった言葉は「何か一つぐらい、人より知っていることがないと教員やってて怖いでしょ」という一言でした。大学を卒業したばかりの私に人に誇れるようなものは何もありません。「確かにこの先本当にやっていけるのか」こんな恐れにも似た気持ちを持つようになりましたが、何をやった

らいいのかわかりません。結局、卒論のテーマであった淡水魚の研究を継続することにし、福井陸水生物研究会の会員となり、先生とのつながりが深くなっていきました。先生は車の運転をしませんでしたので、先生の運転手として県内各地を一緒にまわることができました。事あるごとに調査に同行し、いろいろな見識を得ることができました。あれから20年余りが経過し、現在も淡水魚に関わっていられるのは、先生との出会いがあったからで、今もそのときの一言を心にとどめているからだと思っています。

先生は亡くなる3ヵ月前に、北陸環境科学研究所の埴田照代氏から、「水辺の小わざ」という本を手に入れています。これは手作り魚道など、小規模でありながらもその水辺にふさわしい効率的な改善策を紹介したものです。病床に伏されてからも、さらに研究を貫こうとする先生の姿勢に尊敬の念を抱かずにはいられません。改めて先生の偉業をたたえるとともに、ご冥福をお祈りいたします。



県内の河川で調査中の加藤先生



県内の河川で調査中の加藤先生



加藤先生の著作物

足羽山のアジサイ

学芸員 中村 幸世



昭和54年、福井市政90周年の記念に実施された市民アンケートにより「福井市の花」に選ばれたアジサイ。市内では公園などに数多く植栽されており、しとしとと降る雨の中、涼しげに咲くアジサイの花は、私たちの目を楽しませてくれます。アジサイは、日本でガクアジサイから作られた園芸品種で、古



写真：エゾアジサイ（福井市足羽山にて撮影）

くから栽培されてきました。アジサイの手まりのような花は、雄しべと雌しべが退化して、がくが大きく発達した装飾花の集

まりです。

自然史博物館のある足羽山には約15,000株の様々なアジサイが植えられていますが、この他にエゾアジサイ、コアジサイというアジサイの仲間が自生しています。エゾアジサイは、両性花（雄しべと雌しべが備わった花）と装飾花の両方をつけ、一見するとガクアジサイによく似ています。足羽山では山の斜面などに生えています。花期が6～8月と長く、真夏でも美しい花を見ることができます。コアジサイは、良い香りのする両性花のみをつけ、装飾花はありません。足羽山では車道沿いなどに生え、5月下旬頃から薄紫色の上品な花を見ることができます。植栽されたアジサイもきれいですが、足羽山に自生する野生のアジサイの観察も楽しんでみませんか。



新 任 職 員 の 紹 介



学芸員

加藤 英行
Hideyuki Kato

4月から学芸員として天文を担当させていただくことになりました。天体観望会など、天文に関するイベントを主に担当していきます。市民の皆様と共に天文を楽しみ、天文の魅力をお伝えしていきます。よろしくお願いいたします。



主査

加藤木秀和
Hidekazu Katogi

4月の人事異動で、自然史博物館に来了ました。

ここでは、平成28年に完成予定の福井駅西口の再開発ビルにできる「自然史博物館分館」を担当しています。

迫力満点のドームシアターや天文・宇宙の展示スペースなど、市民の皆様にも来ていただける博物館分館を作りたいと思います。

2年後に完成した際には、ぜひ福井駅前に足をお運び下さい。



主任

長谷川健一
Kenichi Hasegawa

平成26年度から、新しくお世話になることになりました。

平成2年に市役所に採用されてからずっと遺跡の発掘調査などの埋蔵文化財保護を業務としてきましたので、初めて違う職場を体験する機会となります。分館の整備などさらなる飛躍を目指す自然史博物館に、少しでも貢献できたらと思っています。よろしくお願いいたします。

《あとがき》

今号では、昨年亡くなられた加藤文男先生と、寄贈された魚類標本について取り上げました。数多くの貴重な標本が当館に寄贈されたことを嬉しく思うと同時に、自身の専門分野について熱心に研究に取り組む姿勢と行動力は、見習わなければならないと感じます。

博物館では、2014年7月19日から9月23日まで、第78回特別展「どうやって決まるの？動物の大きさーミジンコからクジラまでー」を開催しています。皆様のご来館をお待ちしております。

(有馬)

《交通案内》

【電車】

●福井鉄道福武線 公園口駅 徒歩20分

【バス】

●京福バス：清水グリーンライン（74系統）足羽山公園下バス停（あじさいの道登る）、不動山口バス停（藤島神社登る）各徒歩10分
●コミュニティバスすまいる：西ルート（足羽・照手方面）愛宕坂バス停 徒歩10分

【徒歩】JR福井駅から徒歩30分

《ご利用案内》

開館時間 ●午前9時～午後5時15分（入館は午後4時45分まで）
休 館 日 ●月曜日（祝休日は開館）、国民の祝休日の翌日、年末年始

入 館 料 ●高校生以上100円（20名以上の団体は半額）
中学生以下、70歳以上、障害者および付添の方は無料

